

品川ゆかりの文人たち(1) よしかわ えいじ 吉川英治・え み すい いん 江見水蔭

吉川英治と品川

吉川英治(本名:英次^{ひでつぐ})は、明治25年(1892)8月11日に神奈川県久良岐郡中村根岸(現:横浜市)に生まれる。小学校に入学後、家運が傾き中退して、横浜での船具工など色々な職を転々とし、14歳ころから新聞に俳句や川柳をさかんに投稿するようになる。大正に入ると小説も書きはじめ、大正14年(1925)、雑誌「キング」創刊号より連載された『剣難女難』で、「吉川英治」という筆名を初めて使用した。そして『鳴門秘帖』で時代小説家としての地位を築き、その後の吉川は、『宮本武蔵』『太閤記』『新・平家物語』『私本太平記』などの大作を残し、昭和35年(1960)に文化勲章を受章している。

吉川の時代小説の中で、品川と少し関わりのある作品は『宮本武蔵』で、武蔵の師として沢庵和尚(後に北品川・東海寺の開山となる)が登場する。しかしながら、両者の生きた時代は重なるが、二人を結び付ける史料は見あたらない。



吉川英治 (写真提供: 吉川英治記念館)

品川在住時代の吉川英治

吉川英治は、戦時中、吉野村(現、青梅市柚木町)に疎開していたが、昭和28年(1953)8月、子どもたちの進学・通学のために品川区北品川5丁目に居住地を移した。品川での著作の代表は、昭和25年から執筆をしていた『新・平家物語』である。また『忘れ残りの記』は品川に居住していた昭和30年からの連載である。

品川時代の吉川は、品川文化人クラブの会長を引き受けている。吉川が会長時代の同クラブが目立った活動としては、北品川3丁目の東海寺墓地にある江戸時代中期の国学者、賀茂真淵^{かも の まぶち}の墓の補修工事のために募金活動を行い整備を進めたことである。品川居住時代は5年間と短い、品川地域の文化の発展に大きな足跡を残した。

吉川は『新・平家物語』を脱稿した年、昭和32年(1957)5月に渋谷区に転居(翌年6月、赤坂新坂町に転居)した。その後の吉川は『私本太平記』、『新・水滸伝』の執筆に入る。昭和36年に肺癌を患い体調を崩しながらも『新・水滸伝』を脱稿したが、昭和37年再発し、同年9月17日に没した(享年70歳)。

その後、昭和52年(1977)3月、吉川英治が昔住んだ地である青梅市に吉川英治記念館が開館している。

江見水蔭 一明治文壇、異色の小説家一

江見水蔭は、明治時代中頃から昭和初期にかけて活躍した小説家である。本名は忠功^{なづかつ}。明治2年(1869)岡山生まれ、明治14年に軍人を志して上京した。

しかし、文学や芝居に夢中になり、明治18年(1885)杉浦重剛^{しげたけ}の称好塾に入る。ここで巖谷^{いわや}さざなみ、おおまちけいづつ、小波^{こなみ}、大町桂月^{こうよう}らと会い、尾崎紅葉^{けんゆうしや}の硯友社の同人となった。明治22年硯友社の同人誌「文庫」

に「^{たびえし}旅画師」をのせて本格的な文筆活動に入り、明治25年には自ら江水社を結成して「^{こざくらおどし}小桜緘」を創刊、^{かたい}田山花袋を世に送りだしている。江見の作風は硯友社の写実主義とは異なり浪漫的で叙情豊かなものと評されている。

ところが純文学を志していたにもかかわらず、本心とは異なり濫作の傾向になり、しかも、恋愛小説、侠客小説、歴史小説、探偵小説、軍事小説、探検小説のほか脚本も手掛けるなど幅広いものであった。



江見水蔭（南品川1丁目の自宅庭にて）

品川での江見水蔭 —「国技館」を命名—

江見は明治33年(1900)から町内を転居するが昭和9年(1934)に亡くなるまで品川に住んだ。相撲好きがこうじ、明治34年に北品川・陣屋横町に転居した時、文士相撲を思いつき土俵を築く。同年10月に江見邸で開催された文士相撲大会は本格的で、坪井正五郎、与謝野鉄幹、泉鏡花らのほか、小説家や画家ら200名余り集まり盛大となった。ここでの文士相撲は自ら江見部屋と称して、梅ヶ谷^{ひたちやま}や常陸山(大関)も姿を見せるほど華やかな時代であった。

ところが当時の大相撲は、常設の施設がなく

小屋掛けで各地を巡業していた。明治42年(1909)になって、両国(墨田区)に常設の興行施設「国技館」が誕生した。この「国技館」を命名したのが江見水蔭であるといわれている。

また、江見は遺跡発掘の趣味があり、自ら太古遺跡研究会(明治38年5月発足)を主宰し、自宅(明治37年7月、南品川1丁目御蔵山稲荷神社裏に転居)には太古遺物陳列所を設けて公開するほど遺跡発掘に夢中になっていた。江見が初めて大井の権現台貝塚を発掘したのは、明治35年(1902)の秋であった(JR東京総合車両センター付近、現在は存在しない)。その後の発掘場所は多摩川流域から神奈川・千葉・茨城へと次第に広がっていった。その成果として、遺跡探検の記録である『地底探検記』(明治40年刊)・『地中の秘密』(明治42年刊)・『三千年前』(大正6年刊)の考古小説3部作を残した。これらは考古学史上で貴重なだけでなく、未来の考古学者たちに大きな影響を与えたのである。

晩年は文壇からも離れ、後援者の要請で揮毫と講演の旅を続けるが、昭和9年10月1日愛媛県松山にて肺炎を患い客死^{かくし}、享年65歳。



太古遺物陳列所（『地底探検記』より）